

特集

学校週五日制

- 巻頭言 6 学校週五日制の定着を目指して
●鳩山邦夫
- 座談会 8 学校週五日制が目指すもの
子どもの豊かな未来のために
●(出席者)幸田三郎／見城美枝子／中西 朗／
奥山 浩／諸節トミエ
●(司会者)近藤信司
- 論文 26 主体的に生きる子どもを育てる
新しい学力観と学校週五日制
●亀井浩明
- 30 子どもの生活を活性化する
●坂本昇一
- エッセイ 34 子どもの祭り囃子
●芳賀日出男
- 提言 36 生涯学習社会の中の学校週五日制 ●河野重男
37 学校週五日制調査研究協力校を受けて ●北條富司
38 ゆとりを生む学校週五日制 ●永井順國
39 学校週五日制に伴う変化への期待 ●長谷川 高
40 学校週五日制の実施は地域から ●渡部 暹
41 よく働きよく休め ●鈴木和夫
All Work and no play makes Jack a dull boy !
42 学校週五日制について(序論) ●田村哲夫
43 子どもにスポーツを、いま大人の出番 ●酒井和男
- Q & A 44 学校週五日制Q & A

カラー

1 知の宝庫一博物館
石垣市立八重山博物館(沖縄県)

4 まつり風土記
綱火(茨城県)

表2 名作シリーズ
文殊菩薩及び眷属像

表3 文化財紹介
東韃地方紀行

60 人・この道
高畑 勲

61 教育・文化と地域づくり④
宮城県七ヶ宿町

64 焦点一文教施策

69 私の本棚から
八木近直

70 ニュースポーツ・レクリエーション
ライフセービング

72 ふるさとのうた
かもめの水兵さん

74 科学のひろば
核融合科学研究所①

76 海外教育ニュース

78 郷土に生きる教育家群像⑩
宮崎県

82 ことばの小箱／やさしい教育用語の解説

83 鑑賞席
伽耶文化展
日韓古代の交流をさぐる

84 編集後記

特別記事

大学院の充実と改革

- 論文 52 大学院の整備充実について
その高度化と多様化を中心に
●戸田修三
- 事例紹介 54 最近のアメリカの大学院事情について
●早川 操
- 事例紹介 56 大学院教育の新しい試み
①情報システム学分野の大学院教育
●御牧 義
②国際開発人材の養成と大学院
●小川英次

パリから南へ電車で五〇分ほどセーヌを遡ったところにコルベイユ・エッソンヌ市がある。二月の終わりが、私はここで行われた児童映画祭（日本特集）に参加していた。開会式のあいさつの中で、大使館の岩本書記官が私の平成三年度芸術選奨文部大臣賞の受賞を紹介された。会場の子どもたちや観衆が私の姿を求めて拍手してくれる。観客席の私はどきまぎしながらやつと答礼した。そのおかげかどうか、事前の試写では心理的に理解が難しいと言われていた『おもひでぼろぼろ』は多くの観客の注目を集め、一緒に見た日本人たちが「日本人より感受性が豊かなんですかねえ」とあきれるくらい人はよく笑い、楽しんでる様子だった。あとで聞いてみてもなかなかの好評で、予想もしていなかっただけに大変うれしかった。この映画祭で上映された友人宮崎駿の作品の人気は圧倒的で、特に先年彼が文部大臣賞を受賞した『となりのトトロ』はすっかりフランスの子どもたちのお気に入りとなり、その普遍性国際性がみごとに証明されたことも大きな喜びだった。

滞仏中、パリのパレ・デ・トーキョーで、ポール・グリモー展が開かれていて、幸運にも八七歳のグリモー氏のお元氣な姿に接する

フランスでの拍手



高畑勲

たかはた・いさお 東京大学仏文学卒。アニメ映画演出家。「ゼロ弾きのゴーシュ」で大藤賞、「柳川堀割物語」で毎日映画コンクール文化記録映画賞、「火垂るの墓」でモスクワ児童映画祭グランプリなど。

ことができた。私は学生時代、氏の『やぶにらみの暴君（原題「羊飼いの少女と煙突掃除の少年」）』を見てアニメーションの表現力の大きさに圧倒され、それが遠因となってこの道に進んだのである。感激のあまりかどうか、ろくなごあいさつもできぬままお別れしてしまい、残念だった。しかし、氏は、私の作ったものを是非見たいと言ってくださり、「先生の示してくださった道から随分離れてしまったので心配です」と私が答えたとき、「それはあたりまえじゃないか。おんなじようなものをいくら作っても意味がない。常に新しいものを期待している。私はだから若い人の作品を見るのが好きなんだ」とおっしゃったのが大変印象深かった。

『やぶにらみの暴君』は、一九五二年未完成のまま製作者によつて公開され、世に傑作と讃えられたにもかかわらず、氏と脚本家プレヴェールは納得せず、訴訟を起こし、権利を買い取り、補作改作に着手、ついに三〇年後の一九八〇年に『王様と鳥』として新たに蘇らせたのである。初志貫徹へのこの執念は私どもの遠く及ぶところではないが、これからも氏を範と仰いで新しい課題に挑戦していきたいと思う。



登校拒否問題 の 現状と課題

◆巻頭言

◆座談会

◆登校拒否を考える

(出席者) 甲斐志郎 / 川腰 巍 / 小坂勝好
服部祥子 / 堀内一男 / (司会) 福島忠彦

◆エッセイ

◆文明の仕返し

◆事例紹介

人・この道

教育・文化と地域づくり

郷土に生きる教育家群像

坂本昇一

藤原房子

金子 保ほか

都築忠七

鳥取県三朝町

秋田県

編 集 後 記

▽今月号は、本年度の第二学期から月の第二土曜日を休業日として実施されることとなったいわゆる「学校週五日制」を特集として取り上げています。

▽明治以来久しく我が国の学校においてとられてきた週六日制の仕組みは、学校はもとより国民生活一般のいわば生活のリズムになっていたのではないのでしょうか。

学校週五日制の導入が、教育の分野ばかりでなく各方面に極めて大きな関心を生んだのは、このように我々の毎日の生活にも深いかわりがあるからではないかと思えます。

▽今月中途から学校は夏休みに入り、子どもたちにとって、普段の生活では得がたい貴重な自然体験、社会体験などのさまざまな体験を得る機会の多い時期となります。

編集幹事の子どものころの夏休みといえば、後日それが教訓になったかとはかく、早朝に公民館の庭でラジオ体操を行い、あとは日が暮れるまで山や川、神社の境内などで遊びほうけ、ひぐらしの鳴く夏休みの終わりのころになって、あわてて絵日記、夏休み帳などの宿題をやったことを思い出します。

(A・S)

投稿歓迎

「読者からのたより」欄への投稿を歓迎します。本誌を読んでのご感想、ご意見等をどしどしお寄せください。

●投稿規定

①一件につき四〇〇字以内 ②住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記(誌上匿名可) ③掲載分には薄謝進呈

※文章を一部手直しさせていただきますことがあります。

●送り先

〒100 東京都千代田区霞が関三-二-二

文部省大臣官房政策課 「文部時報」編集部

MESC 61 月刊

文部時報 7月号

第1387号

●著作権所有——文部省◎

●発行所——株式会社 きょうせい

本社 〒104 東京都中央区銀座7丁目4番12号
(営業所) 〒162 東京都新宿区西五軒町4-2
電話 03-3268-2141(代表) 振替口座 東京9-161番

●印刷所——株式会社行政学会印刷所

平成4年7月10日印刷
平成4年7月10日発行

定価500円(本体485円)(〒61円)
年間購読料6,000円

・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはよりの書店にてお願いします。

●本誌の掲載文のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。